

日・中・韓の伝統衣服の共通点と相違点

A19AB028 小澤彩乃

1. はじめに

中学校の社会や高等学校の世界史で各時代の衣服は、多少触れているもののアジア圏の衣服が説明される機会はほとんどない。一方、服装史については、国ごとで研究され、中国服装史においては、黃能馥、陳娟娟他著の「中国服飾史図鑑」や袁仄著の「中国服装史」などが、また韓国についても、柳喜卿、朴京子著の「韓国服飾文化史」や、高幅男著の「韓国伝統服飾史研究」など日本語にも紹介されている。

しかし、歴史的にも地理的にも我が国とつながりの深い中国、韓国についても漢服やチマ・チョゴリなど単体では認知しているものの、これら各国の歴史服は横断的に展開されることはなく、関連性を見出した研究は少ない。また、時代背景やつながりはあまり知られていない。

また、被服の構成法について、立体構成の立場をとる西洋の洋服に対して、これら日・中・韓の服装は平面構成の代表ともいえる。今回、これら3国について現代に至るまでの歴史と各時代の伝統衣服について検討することは、中等教育における科目間連携の推進にも寄与すると考える。

2. 各国の伝統衣服

紀元前500年～紀元後300年頃は資料が少なくそれぞれのつながりは見られなかった。300～1000年頃は中国の唐が日本と韓国に大きく影響を及ぼし、3国とも上下二部式の衣服が着用されていた。1000～1900年頃は3国の特徴が分かれ、独自の服飾の特徴がみられる。現代は完全に確立し、それぞれの平面構造の特徴がみられる。以上、4区分の時代に分けて特徴を見ていく。

2-1 紀元前500年～紀元後300年

日本と韓国は中国からの影響が大きい

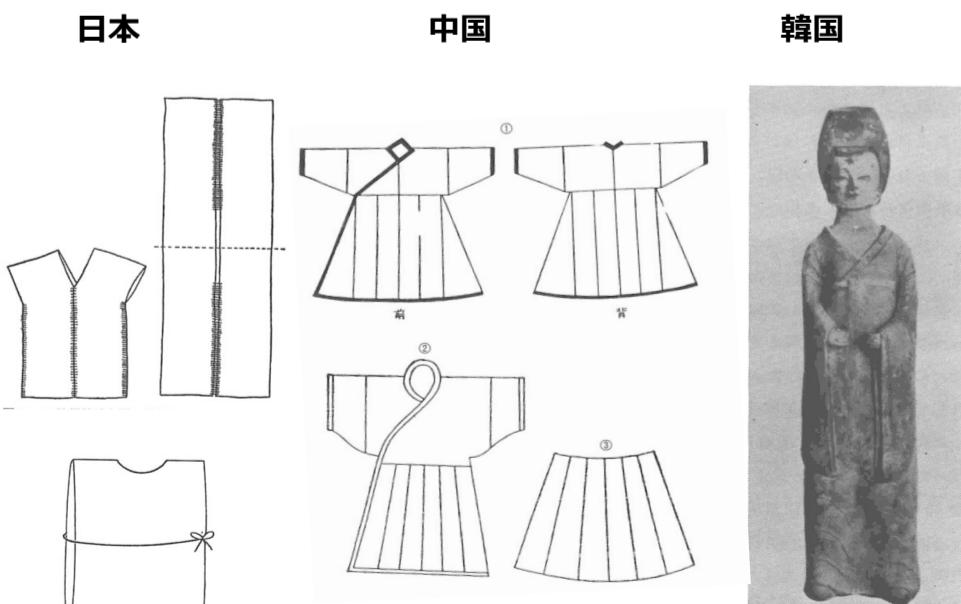


図1-1 横幅衣・貫頭衣

図1-2 深衣

図1-3 襪襦

2-2 300～1000年頃

3国とも上下二部式の衣服を着用。まだ中国の影響は受ける



図2-1 襪襦

図2-2 裳裙

図2-3 裳・袴・裳・袍

2-3 1000～1900年頃

それぞれの国のかたちが現れる

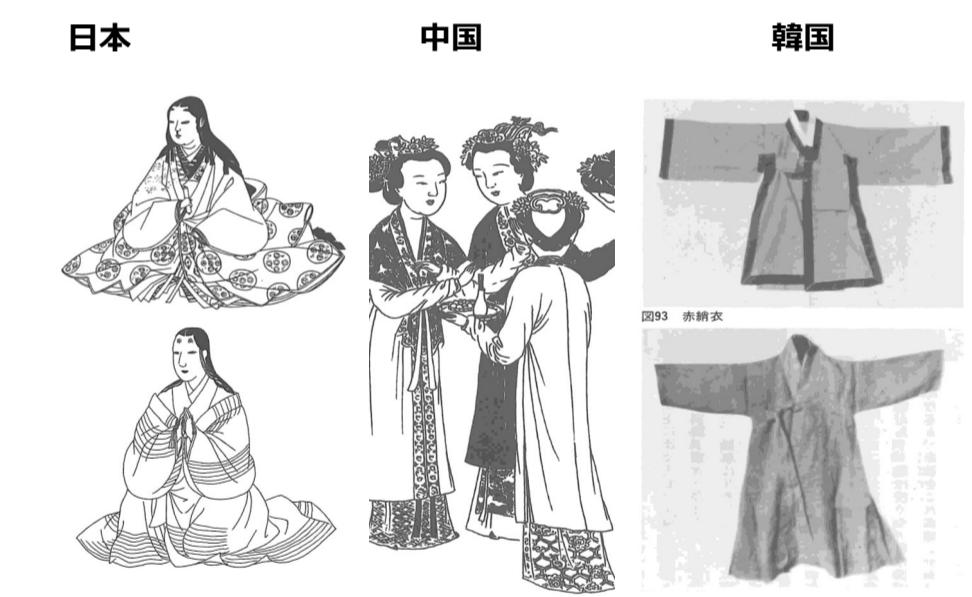


図3-1 打掛・腰巻

図3-2 背子・衫・裙・帔子

図3-3 上衣と裳

2-4 現代

日常着で着用されず、特別な時に着用される



図4-1 きもの

図4-2 漢服

図4-3 チマ・チョゴリ

3. 伝統衣服の制作

3-1 デザイン

3国の特徴を取り入れたデザインにするため、すべて平面構成の形は変えずに衿や袖を組み合わせて考案した。作品Aは日本のきものと漢服を組み合わせ、作品Bは中国の漢服の襦裙ときものを組み合わせ、作品Cは韓国のチマ・チョゴリときものを組み合わせたデザインとした。

3-1 完成作品

日本の完成作品Aを図6に、中国の完成作品Bを図7に、韓国の完成作品Cを図8に示した。



図6-1 完成作品A(前面)



図7-1 完成作品B(前面)



図8-1 完成作品C(前面)



図6-2 完成作品A(背面)



図7-2 完成作品B(背面)



図8-2 完成作品C(背面)

4. おわりに

3国の歴史を単独で見るのではなく、近隣諸国の歴史も重要なことが分かった。特に日本、韓国は7世紀ごろまで自国の文献を持たなかつたため、中国からの情報が多く、伝統衣服も影響していた。中・高の教育においても日本文化の伝承のためには、単独で学ぶのではなく、それぞれ近隣諸国の歴史を絡めて教育することが良いと考える。

3-2 制作過程

まず、きものは着なくなつたきものを再利用するため、絞りのきものを一旦ほどいてから構成した。使用したきものを図5-1に示した。チマ・チョゴリは型紙がなかつたため布幅を決め、縦につなげてボリューム感を出すためにタックを入れた。漢服は図5-2の羽織をほどき作り替えた。また、上衣はきものと同様の形状を作り、下衣はチマと同様に縦で布をつぎ、プリーツを入れるようにした。すべて紐で着用できるようになっており、丈が合えば誰でも着用できるようになっているのが平面構成の特徴であり、今回はその特徴を取り入れて制作した。



図5-1 使用着物



図5-2 使用羽織



図5-3 制作過程



図5-4 制作過程

5. 参考・引用文献

- 1) 増田美子：「日本服飾史」東京堂出版（2013）
- 2) 朴京子・柳喜啓：「韓国服飾文化史」源流社（1983）
- 3) 華梅(施潔民訳)：「中国服装史～五千年の歴史を検証する～」白帝社（2003）
- 4) 黄能馥 陳娟娟 黄鋼：「中国服飾史図鑑 第1巻、第2巻」国書刊行会（2018）